地方大学は闇に面するか光に面するか
～北海道からのウコ・チャランケ～

山内　亮史
（旭川大学長）

一　旭山動物園と旭川大学

昨年夏、志立旭川大学は「論、旭山動物園」というテーマで一週間公開講座を開いた。

これは単純に旭山動物園人気にあやかろうとした企画ではない。

それは、旭山動物園の昨今の大人気には、地方私大としての我が旭川大学の影は影なりに果たした役割があり、光は光なりに果たしてゆく役割があると考えたからに他ならない。

一九九六年六月、一人の青年市議が旭川市議会で旭山動物園の施設老朽化問題をとりあげ、このまま園を眠らせてよいのかを質した。この安田佳正氏は、私の大学の卒業生であった。以後、かれは議会のたびに全国各地の動物園事情や、ニューヨークはブロンクス動物園の展示方法や教育機関としての役割等、改善を通した再生を訴え続けたのである。そして次第に前向きな答弁を理事者から引き出してゆく。菅野浩、当時の園長（現旭川大学女子短期大学部講師）は喜んだ。厳しい市財政の中、動物園のみ多額の予算を振り分けるわけにはゆかない。そ

の時、一冊の研究レポートが提出された。当時、本学の教授であった小野﨑保氏が提出した「旭山動物園の経済波及効果分析」である。そこには、動物園のもたらす様々な波及効果が産業連関クラスターとして分析されていた。このことで市長は厳しい議会の批判をかわすことができたのである。

人気が出てきて全道一の入園者を記録したとき、読売新聞旭川支局の有我栄一記者は、これを「旭山動物園物語」として全国版に五回連載し発信した。彼も本学の卒業生であった。

また、人気の決め手であった「行動展示」の空飛ぶペンギンの園舎設計を手がけたのは、本学理事の橋本川島コーポレーションの社員であった。

私たちは、この人気がどこに由来するものか大学で論じ合う必然性を感じた。それらは、私達にとって「動物園とは何か」に始まって、生命の輝きとその様式、環境問題への問いかけ、まちづくりの意義、教育施設としての意味づけ等々から成り、途中小菅正夫園長の講義と案内によるフィールドワークと多様なものから成っていた。

受講者の中にＮＨＫの放送記者がおり、後に「プロジェクトＸ」の一助にもなったりしたとのことであった。

地域密着型地方私大は、このような中で存分に滑走しているのである。

二　地方大学の四つの機能

今、「地方」とは何かを原理的に定義づけようとは思わないが、一般に大学がその所在する地域にあって果たしている機能は四つ考えられる。

一つは、その地域の人々に高等教育の学習機会を与えることであり、二つは、その地域への在学生及び卒業生を通した労働力・人材の供給機能であり、三つめは、知的情報集積を中心とする文化資本として果たす役割である。そして四つめに、大学という存在それ自体が地域に付与するアメニティ効果である。このような四つの機能は、地域にあってはより具体的、より直接的にある。

先に旭山動物園と旭川大学の関わりについて述べたのは、その事例を分かりやすく示したかったからに他ならない。

そして、この具体性と直接性は、現代社会でより切実に求められ、その産出力が試されているのである。

何故なら二一世紀問題群の中で最大の問題である環境問題一つとってみても、その発現は必ずある一定の地域で起こる。その生活実態の只中に発現するにも拘わらず、その解決に至るプロセスは、企業組織、官僚機構といった法制度エージェントを通過する過程で利潤追求、合意調達という目的に水路付けされて、より抽象的より間接的な形をとらざるをえなくなる。

そうなると地域は、その問題群の内、弱者・被害者という形でのみ関わってゆくことになる。古くは水俣の例を挙げるまでもなかろう。

今北海道は、未曽有の財政危機にある。その根底には、ジャンボジェットの後輪経済という現実がある。不況が来るときには真っ先に降りてきて、不況が去るときには最後まで収まらないという意味である。

この文脈で地方大学が果たす役割は、今後、いくら強調しても強調しすぎることはない。

三　揺らぐ地方大学の公共性

多くの大学が所在する市町村は歴史、文化、風土、経済的要件等を異にしつつそれぞれ多様な特性を活かして歩んできた。

そしてとりわけ国土の七割を占める農漁村は、食料供給や国土保全、水源涵養など国民生活を支える重要な役割を果たしている。しかしこの数年、圧倒的に進む経済格差の中で地域としての一体性を保ちつつ持続するのが困難な局面にある。

とりわけ若者の流出は目を覆う現状にある。

地方行財政改革下での地方分権時代を迎え、地方は本格的少子高齢化社会をすでに先取りしていることから、これまで以上に財政事情はひっ迫し多様で高度化したニーズに応えてゆくことに困難をきたしている。

このような地方市町村をめぐる状況下にあって地方大学はその存立基盤、とりわけ、入学志願者と財政基盤の面で危機に直面している。いうまでもなくこれはメダルの裏表の関係にある。

これに対する現在の高等教育政策はとうてい有効とは思われない。

圧倒的財政力格差を前提とした独立行政法人が少ないパイの中に割って入り、従来の棲み分けを破壊しつつある。その上、北海道の場合、他県にはみられない植民地的事情がある。それは、駒澤、拓殖、東海、東農大、専修、国学院といった各大学がそれぞれのブランド力で、北海道校を設置している。

こうした中で地域で独自の歴史を刻んできた大学が生きのびようとする意欲は、今、その理念の保持と共に試練に立っている。採用された若い大学教員は、地域に分け入ることなくすきあらば東京に近づこうとし、残された教員はいじけたまま開き直る。こんな大学は多いことであろう。

日本北端の旭山動物園を創った当時の旭川市長は五十嵐広三氏（元建設大臣、村山内閣の元官房長官）であったが、氏はかつて私に「どうか旭川大学は、一つの大学づくりが一つのまちづくりにつながるような大学になって下さい」と語ったものであった。

「自由な市民が自由な学芸に捧げた大学」、「山は大雪、川は石狩、地域に輝くオンリーワン大学」、私はいろいろユニバーシティアイデンティティーを口ずさんでみるが、どうしてもその前にウコ・チャランケをしたくなる。このアイヌ語はお目にかかった日高二風谷の長老、萱野茂氏から教えていただいたもので「言葉が天から降りてきてとことん話をつめる」という意味である。単純に「文句をつける」ということではない。

ただ一つお願いがある。地方の大学の学生に支援の輪を！